

台湾原住民族における〈文学モチーフ〉と〈物語の文法〉^{*1}

“Literature Motifs” and “Narrative Grammar” among the Indigenous Peoples of Taiwan

山田 仁史
Hitoshi Yamada

Abstract:

According to literature studies, several motifs are frequently found in literary works all over the world (Frenzel 2008). For instance, “Amazons” appear in Herodotus’s *Historiae* and other works as a group of warlike women living without men; “inhabitants on an island” is ambivalent in that they are longed for on the one hand while feared on the other; “visit to the underworld” has also been depicted in famous pieces like Ovid’s *Metamorphoses*, Japan’s classical mythology *Kojiki* and so on. Although there are other classifications of motifs as that of Stith Thompson, the present paper seeks to find correspondences of motifs of Taiwan indigenous literature and world literature, hence the author prefers Frenzel’s classification.

In mythologies the structure that “the hero/heroine goes somewhere and comes back” is said to be the basic “narrative grammar” (Otsuka 2008). This view developed out of previous efforts of many scholars engaged in so-called hero myths, such as J. G. von Hahn, O. Rank, Lord Raglan, J. de Vries, and J. Campbell, and Otsuka’s synthesis seems to be most comprehensive to this day.

From this point of view, traditional stories of the indigenous peoples of Taiwan contain also common motifs and grammars (such as Amazons, visit to the underworld, shooting the sun etc). If in the future traditional narratives of Taiwan are to be employed as inspirational sources for creative activities, the above mentioned stories might offer welcome starting points.

Keywords: indigenous peoples of Taiwan, literature motifs, narrative grammar

キーワード：台湾原住民族、文学モチーフ、物語の文法

1 はじめに

学术界においては、物語について神話 (myth)・伝説 (legend)・昔話 (folktale) の三種に区別するのが通例である*²。これらは、いわゆる口承文芸 (oral literature) ないし民間文学 (folk literature) の三ジャンルを成す。筆者は、宗教民族学の観点から台湾原住民族の口承文芸・民間文芸を研究してきたが、本稿で論じたいのは、これらの中に、世界のさまざまな文学と共通するような〈文学モチーフ〉 (literature motifs) や〈物語の文法〉 (narrative grammar) が存在するのか、存在するとすれば、いかなる形でか、という問題である*³。初めに、〈文学モチーフ〉および〈物語の文法〉という概念について、研究史も含めて紹介した後、台湾原住民族の具体的事例をとりあげつつ、この課題に取り組んでみたい。

2 〈文学モチーフ〉と〈物語の文法〉

(1) 〈文学モチーフ〉

世界文学におけるモチーフ (motif) 分類は、さまざまな形で可能であるが、筆者がここで依拠するのは、ドイツの文学研究者エリザベート・フレンツェル (Elisabeth Frenzel, 1915 生) によるものである。彼女は 1976 年初版の『世界文学の諸モチーフ』において、ヨーロッパおよび地中海世界の文学作品を中心に、それらに共通して見られる 54 のモチーフを挙げた。本書はその後、高い評価を受け、2008 年に出た最新の第 6 版では、モチーフ数は 58 に増えている*⁴。

これらのモチーフ中には、台湾原住民の伝承中に見られるものも少なくない。たとえばアマゾン族 (Amazonen)*⁵、兄弟同士の敵対 (Brüder, Die verfeindeten)、神の地上訪問 (Gott auf Erdenbesuch)、寝取られ男 (Hahnrei)、島に住む者 (Inseldasein, Das erwünschte und das verwünschte)、近親相姦 (Inzest)、秘密の恋愛関係 (Liebesbeziehung, Die heimliche)、月 (Mond, Der)、下界訪問 (Unterweltsbesuch) といったものが、そうした例として挙げられる。

本稿では、これらのうちアマゾン族、島に住む者、下界訪問という 3 つのモチーフをとりあげることにしたい。これら 3 モチーフは、後述する〈叙事文法〉とも関わりが深い、という理由からである。

まず、世界文学における 3 モチーフの現れ方を、フレンツェルに依拠しつつ見てみよう。「アマゾン族」については、ヘロドトス『歴史』(前 5 世紀)に次のように描かれている。ギリシャの伝説によると、アマゾン族とは軍神アレース (Ares) とハルモニア (Harmonia) の子孫で、小アジアの黒海沿岸スキュタイ (Skythai) の地に住んでいた。常に馬にまたがって狩猟と戦争に明け暮れ、弓を引くのに邪魔にならないよう右の乳房を切り取っていたので、「乳なし (a + mazos)」と呼ばれたという。年に一度、彼女らは近隣部族の男たちと交わって子を産んだが、女兒のみを育て、男児は殺すか盲目ないし跛足にして使役したとされる*⁶。フレンツェルによれば、女人国に住む好戦的な女性たち、というモチーフはその後世界文学において長く現れ続けた。中には離島に住むとされた場合もあり、ジャンヌ・ダルク (Jeanne d'Arc) など実在の人物と結びついたり、新大陸の「発見」後は、アマゾン族の居住地がアメリカ大陸や太平洋に求められもした。さらにこのモチーフは男装の佳人というヒロイン像を生み出したり、女性解放思想とも結びついて発展してきた*⁷。

次に「島に住む者」は、「望ましき、また望ましからざる」と題されているように、両義的な存

在である。孤島は、避難所、かくまわれた所、秩序の場、この世の楽園と見なされることもある一方、放浪先、隔離された所、追放地、狭くて何もない死ぬほど退屈な場所をも意味する。こうした島の神話は海洋民によく見られ、敵族や怪物、魔性の女たちなど、不気味な者が住む所とされたり、はるかな憧憬の対象ともなってきた。ことに太平洋への航海が盛んになると、タヒチなどはそうした異国趣味を駆り立てる島として、数々の文学・芸術作品（たとえばゴーギャン）に描かれてきた^{*8}。

最後に「下界訪問」だが、フレンツェルは「死者の国」という性格づけをもとに論じており^{*9}、これは必ずしも台湾原住民の故事に現れる特徴ではない。しかし、このモチーフは世界文学ことに神話においては好まれてきたもので、ギリシャのオルフェウスの話がよく知られている。たとえばオウィディウス（前43–後17/18）『変身物語』によれば、トラキアの楽人オルフェウスは、妻のエウリュディケが蛇に噛まれて死んだのを悲しみ、下界（冥界）ハデスを訪れた。そしてアウエルヌス湖の谷あいを出るまではうしろを振り返ってはならない、という条件つきで、妻を返してもらった。しかし彼はその禁を破ってしまい、妻はもと来たところへ再び落ちて行ったという^{*10}。日本神話におけるイザナキの黄泉国訪問譚も、しばしばこの話と比較されてきた。『古事記』（712年序）によれば、火神を産んだ際、その火に焼かれて死んだ妻のイザナミを追って、イザナキは死者の国を訪れた。しかし妻に「見るな」と言われた禁止を破り、彼もやはり彼女を連れ戻すことに失敗したというのである^{*11}。

先に述べたように、フレンツェル以外にも、文学モチーフの立て方はいろいろある。民間文学 (folk literature) に関しては、アメリカのステイス・トンプソンが著した『民間文学モチーフ索引』（1932–36年初版、1955–58年増訂版）がよく用いられている。モチーフという概念の振幅を示すため、これにも言及しておきたい。この索引では、非常に細かくモチーフが設定され、A から Z の頭文字のもとに分類されている^{*12}。すなわち、

- A: 神話的モチーフ (Mythological Motifs)
- B: 動物たち (Animals)
- C: 禁忌 (Tabu)
- D: 呪術 (Magic)
- E: 死者 (The Dead)
- F: 驚異 (Marvels)
- G: 鬼怪 (Ogres)
- H: 試練 (Tests)
- J: 賢者と愚者 (The Wise and the Foolish)
- K: 策略 (Deceptions)
- L: 逆転した運命 (Reversal of Fortune)
- M: 未来を定める (Ordaining the Future)
- N: 偶然と運命 (Chance and Fate)
- P: 社会 (Society)
- Q: 報酬と罰 (Rewards and Punishments)

R: 囚われ人と逃亡者 (Captives and Fugitives)
S: あるまじき残酷さ (Unnatural Cruelty)
T: 性 (Sex)
U: 生の本質 (The Nature of Life)
V: 宗教 (Religion)
W: 人格特性 (Traits of Character)
X: 滑稽 (Humor)
Z: その他のモチーフ群 (Miscellaneous Groups of Motifs)

以上のように分類されており*¹³、「アマゾン族」を例にとれば、「F112. 女人国への旅」(Journey to Land of Women)にも、「F565. 女性戦士・女性狩人」(Women warriors or hunters)にも含まれる。そして前者はさらに、「F112.1. 美女たちの島で、恋する女たちに敗れる男」(Man on Island of Fair Women overcome by loving women)、「F112.2. 女たちの町」(City of Women)というように下位分類されている。このように、トンプソンの索引は大変便利ではあるが、本稿では台湾原住民の文学を民間文学のみならず、より広く世界文学に位置づけることが可能であるかを探るため、フレンツェルのモチーフを用いることとした。

(2) 〈物語の文法〉

〈物語の文法〉の研究についてここでは、英雄神話の構造についての先行研究をもとにしつつ、日本の批評家大塚英志(1958生)によりまとめられた議論*¹⁴に依拠してみたい。筆者の見るところ、物語の文法についての先学の諸研究を踏まえ、それを集大成したのは、彼の功績と思われるからである。

まず、英雄神話の構造研究について、その歩みをたどってみよう。19世紀後半、英雄神話・伝説には同一の構造が見られることが、何人かの研究者により指摘され始めた。それをまとめた形で発表したのは、オーストリアの外交官・アルバニア学者のヨハン・ゲオルク・フォン・ハーン(Johann Georg von Hahn, 1811-69)である。死後に刊行された『伝説学研究』(1876年)において、彼はインド＝ヨーロッパ語族の英雄伝説に次のような共通の構造が見られることを図示した：

・誕生

1. 主人公は非嫡出の生まれ
2. 母は土着の王女
3. 父は神ないし余所者

・青少年期

4. 父祖への警告的予兆
5. そのため主人公は遺棄される
6. 動物による哺乳
7. 子供のいない牧人夫婦に育てられる
8. 目上への不遜

9. 異郷での奉仕

・帰還

10. 勝利の帰還と異郷への帰着
11. 迫害者の敗北、支配権の獲得、母の解放
12. 都市の建設
13. 尋常でない死に方

・副次的状況

14. 近親相姦による誹謗と早世
15. 侮辱された従者による報復
16. 弟の殺害

そしてフォン・ハーンは事例として、ペルセウス、ヘラクレス、オイディプス、アンピオンとゼー
トス、ペリアスとネレウス、レウカストスとパルハシオス、ロムルスとレムス、テセウス（以上ギ
リシャ・ローマ）、ヴィッティヒ、ザクセンのジークフリート（以上シズレクのサガ）、ヴォルフディー
トリヒ（中世ドイツ）、キュロス、カイ・ホスロー（以上ペルシャ）、カルナ、クリシュナ（以上マ
ハーバーラタ）を挙げた^{*15}。

20 世紀に入ると、フロイトの弟子オットー・ランク（Otto Rank, 1884-1939）が精神分析の視点
からやはり英雄誕生の神話に共通の構造を見出し、「平均的伝説」を次のようにまとめている（『英
雄誕生の神話』1909 年初版、1922 年改訂版）：

主人公たる英雄はきわめて身分の高い両親の子で、たいていは王子である。

その生誕の前には、困難がつきまとっている。たとえば禁欲、あるいは長期にわたる不妊、また
は外部からの禁止や妨害による両親のかくれた性交など。母胎にいる間に、あるいはすでにそれ以
前から、その誕生を警告する告知（夢、神託）が行われ、たいていは父親に危難が迫っていると告
げる。

そのため、新生児はたいていは父親もしくはそれに代わる人物の命令で、殺されるか棄てられる
かすることになる。通常は小さな箱に入れられ、水にゆだねられる。

それから、動物または身分の低い人々（牧人）に救われ、雌の動物あるいは身分の低い女から乳
を飲ませてもらう。

成長し、紆余曲折を経て高貴な両親に再会し、一方では父親に復讐し、他方では認知され、出世
し名声を得る^{*16}。

ランクが挙げた主な事例は、サルゴン、モーセ、カルナ、オイディプス、パリス、テレポス、ペ
ルセウス、ディオニュソス、ギルガモス、キュロス、トラカーン、ロムルス、ヘラクレス、イエス
（！）、ジークフリート、トリスタン、ローエングリン、スケアフである^{*17}。インド＝ヨーロッ
パ語族を越え、地中海世界へも広がっており、一部はフォン・ハーンの例と重複している。

独自の立場から英雄神話に取り組んだのは、英国の軍人で著述家であったロード・ラグラン（Lord
Raglan）こと、第 4 世ラグラン男爵フィッツロイ・サマセット（FitzRoy Somerset, 4th Baron

Raglan, 1885-1964) である。彼はその著『英雄』(1936年初版)において、やはり英雄神話に共通の構造を取り出し、22の要素から成る「定型」にまとめた。それらは次のとおりである：

1. 英雄の母は王族の処女である。
2. 父は王であり、また
3. しばしば母の近い親戚である。しかし
4. 彼女が受胎する状況は常態ではなく、また
5. 彼は神の息子とも世評される。
6. 出生のとき、通例は父、あるいは母方の祖父によって、彼を殺す企てがなされる。しかし
7. 彼はこっそり運び去られ、そして
8. 遠国で養父母に育てられる。
9. 幼年期については何も語られないが、
10. 成年に達すると、彼は未来の王国へ帰還するか、出発する。
11. 王（および／または巨人、竜、怪獣）に勝利をおさめたのち、
12. 王女、しばしば先王の娘を娶り、
13. 王となる。
14. 彼はしばらくの間、平穏に国を治める。そして
15. 法を定める。しかし
16. 彼は後に神（および／または臣民）の恩顧を失う。そして
17. 王位および都市から追放される。その後
18. 彼は謎の死をとげるが、
19. それはしばしば山頂においてである。
20. 彼の子供たちは、存在するとしても位を嗣がない。
21. 彼の遺骸は埋葬されない。しかし
22. 彼は一つ、あるいはそれ以上の聖廟をもつ^{*18}。

ラグランが検討した事例は、オイディプス、テセウス、ロムルス、ヘラクレス、ペルセウス、イアソン、ベレロボン、ペロプス、アスクレピオス、ディオニュソス、アポロン、ゼウス（以上ギリシャ・ローマ）、ヨセフ、モーセ、エリヤ（以上ヘブライ語聖書）、ワトゥ・グヌン（Watu Gunung, ジャワ）、ニイカンゲ（Nyikang, スーダンのシルック族）、シグルズないしジークフリート（北欧）、レイ・ラウグフェス（Llew Llawgyffes, ケルト）^{*19}、アーサー、ロビン・フッド（以上英国）である^{*20}。印欧語族を中心としつつも、アフリカや東南アジアへも視野を広げている点が注目に値する。

あまり知られていないが、オランダのゲルマン学・北欧学・宗教学者ヤン・ド・フリース（Jan de Vries, 1890-1964）も、主としてインド＝ヨーロッパ語族の諸英雄に関する神話・伝説・昔話に共通して見られる構造に着目した。そして『メルヒェンの諸考察』（1954年初版、1967年第2版）を出した後、一般向けに書かれた『英雄歌謡と英雄伝説』（蘭語初版1959年、著者自身による独語版1961年）において、次のようなシェーマを提示した：

I. 英雄の懐妊

- A. 母は処女で、時に神により、または英雄の父との婚外性交により妊娠する。
- B. 父は神である。
- C. 父は動物だが、しばしば神が変身した動物である。
- D. 子供は近親相姦の結果である。

II. 英雄の誕生

- A. 超自然的に行われる。
- B. 「生まれない」英雄が、帝王切開により母胎から取り上げられる。

III. 英雄の幼少期への脅威

- A. 子供は、夢で子供が危険な存在になると警告された父により、または恥辱を秘匿しようとする母により、遺棄される。
- B. 遺棄された子供は動物により哺乳される。
- C. 後に子供は牧人などに見つけられる。時に、遺棄された子供は直ちに牧人に見つけられ、かくまわれる。
- D. ギリシャの伝説では、多くの英雄が神話的人物により育てられる。

IV. 英雄の成長の仕方

- A. 英雄は早くから能力、勇気などの属性を示す。
- B. しかし少年は初め発達が遅いこともある。啞だったり、狂気と見られることもある。

V. 英雄は時に、不可傷性を獲得する。

VI. 最もよく見られる功業はドラゴンその他の怪物との闘いである。

VII. 英雄は、ふつう大危難を克服した後、処女を得る。

VIII. 英雄は下界へ旅をする。

IX. 英雄が幼少期に追放されていた場合、彼は帰還して敵対者を倒す。しかし彼は時に、努力して征服した王国を再び手放さねばならない。

X. 英雄の死。しばしば早世する *²¹。

さて、以上のように主に印欧語族に限定して進められてきた英雄神話の構造分析を、さらに全世界に拡大したのは、アメリカの神話学者ジョーゼフ・キャンベル（1904-87）であった。1949年に初版が出た『千の顔をもつ英雄』において彼は、精神分析の立場に依りつつ、無文字社会の神話までも射程に入れて、英雄神話のダイアグラムを次のようにまとめた。

神話の英雄は、その日常的な小屋や城から抜け出し、冒険に旅立つ境界へと誘惑されるか拉致される。あるいは自ら進んで旅を始める。そこで彼は道中を守り固めている影の存在に出会う。英雄はこの存在の力を打ち負かすか宥めるかして、生きながら闇の王国へと赴くか（兄弟の争い、竜との格闘、供犠、魔法）、相手に殺され、死んで下界へ降りて行く（四肢解体、磔刑）。こうして英雄は境界を越え、未知ではあるがしかし奇妙に馴染み深い諸力の支配する世界を旅してゆく。超越的な力のあるものは容赦なく彼を脅かし（試練）、またあるものは呪的支援を与える（助力者）。神話的円環の最低部に至ると、英雄はもっとも厳しい試練をうけ、その報酬を克ちとる。勝利は世界の

母なる女神と英雄との性的な結合（聖婚）として、父なる創造者による承認（父親との一体化）として、彼自身の聖化（神格化）として、あるいは逆に——それら諸力が英雄に敵意的なままであるならば——彼が今まさに克ちうる機会に直面した恩恵の掠奪（花嫁の掠奪、火盗み）としてあらわされうる。こうした勝利こそ本質的には意識の、したがってまた存在の拡張（啓示、変容、自由）にはかならない。最後の課題は帰還することである。超越的諸力が英雄を祝福すれば、彼は今やその庇護のもとに（使徒として）出発するし、そうでなければ彼は逃亡し追跡される（変身しながらの逃走、障害を設けつつの逃走）。帰還の境界に至ると超越的諸力はそれ以上進めない。英雄は畏怖すべき王国から再臨する（帰還、復活）。彼が持ち帰った恩恵がこの世を復興する（霊薬）*²²。

以上のように、さまざまな学者の研究によって、英雄神話の構造における共通要素が明らかにされてきた。それらのうち、やや周辺の要素ではあるが、ここでは特に、

- ・英雄が箱などに入れられ流される「遺棄・漂流」
- ・英雄が大魚に呑み込まれる「嚙下」（ヨナ型）
- ・英雄が竜などの怪物と闘う「竜退治」
- ・障害を設けつつ逃げる「呪的逃走」（magic flight）・「障害逃走」（obstacle flight）

といった諸要素にも、注意しておこう。これらは、後述するように、台湾原住民の伝承中にも出現するからである。

近年、批評家の大塚英志はその著『ストーリーメーカー』において、興味深い所論を展開している。彼は上述してきたような英雄神話研究、とりわけランクやキャンベルらのそれを踏まえ、「物語の文法」という、より一般的な構造を論じているのである。それによれば、物語の文法の基本とは「行って帰る」ことであり、それは必ずしも物理的な移動を伴わなくてもかまわない。たとえば「日常」から「非日常」へと「境界線」を越えて移行し、主人公が何かを獲得して「日常」へ戻って来る、つまりこの往還によって「欠落したものが回復する」というのが基本的な叙事文法だという。こうした叙事文法は、今やハリウッド映画などのマニュアルにも採用されており、大塚自身、大学で物語創作の指導をする中で、そのための手引として執筆されたのが本書『ストーリーメーカー』なのである*²³。果たして、こうした叙事文法は、台湾原住民の伝統的な文学（口承文芸、民間文学）中にも見出されるであろうか。

3 台湾原住民族における事例の検討

筆者は学位論文『台湾オーストロネシア系諸民族の宗教＝神話的諸観念』において、台湾原住民族の神話伝承に出現する96の話型を設定し、それらの分布を村落単位で一覧にした*²⁴。その際、主要な資料としては、日本統治時代の諸記録、ことに小島由道ほか『蕃族慣習調査報告書』全8冊、佐山融吉『蕃族調査報告書』全8冊、小川尚義・浅井恵倫『原語による台湾高砂族伝説集』を用いた*²⁵。本節では、この一覧表をもとに、先に見た〈文学モチーフ〉と〈物語の文法〉の存否を探ってみたい。

(1) 女人島

アマゾン族に類する女人島の故事は、タイヤル（22話）、セデック・タロコ（6話）、サイシヤッ

ト（3話）、ブヌン（5話）、パイワン（9話）、プユマ（2話）、アミ（9話）の各族から知られている*²⁶。比較的詳細に語られている、アミ族里漏社の例は次のようなものである。

【事例 1a】 マチウチウ（maciwciw）という男がある日、海岸で薪を拾っていたところ、巨大な鯨が突然現れ、彼を呑み込んで海に潜って行った。しばらくしてマチウチウが気が付くと、真っ暗だったので火打石で火をともして調べたところ、周囲はすべて内臓だったので、鯨の腹の中に呑み込まれたことを知り、幾日かの間は辺りの肉を切り取り、これを食べて飢えをしのいだ。やがて再び鯨の体外に出され、目の前にあった島に上陸したところ、それは女人島（バライサン falaysan）だった。この島の女たちは、南風が吹く時に南に向かって大気を吸うとただちに妊娠する。そして、もし生まれた子が男子の場合には食べてしまうので、この島には男子がいないという。さて、マチウチウは女たちに捕まり、柵の中で豚として飼われることになった。そして日々食料を与えられ、肥らされて食われる日も近くなったある日、彼はすきを見て逃げだし、サイニン（sayning）という大魚の鰭にすがり、3、4日ばかりして故郷に帰り着いた。そしてこの時サイニンに言われたとおり、以来五年に一度、里漏社の海岸でバライサンに向かい供物を捧げる祭礼を行うようになり、それは今日まで続いている。さらに、同社に保存されている丸木舟は、マチウチウが女人島で難儀した時の食餌容器を記念として模作し、祈禱対象として今に伝えるものだという*²⁷。

この話で興味深いのは、現存している丸木舟の由来譚としての性格である。ここには伝説化の傾向、つまり、事物の来歴を語る史実として伝えようとする傾向が見て取れる。同じ話は、より断片的な形ではあるが、伊能嘉矩もすでに報告している。それによれば、

【事例 1b】 昔、非常な旱魃で、少しも雨が降らず、そのうえ腹痛の病人が多く出たため、雨乞をするため海辺に出たところ、チ・サイリン（tsisairin）という鯨のような大魚が出て来て、マチウチウ（matsiutsiu）という名の一青年を口にくわえて泳ぎ去り、バリサン（varisan）という女のみ住む島に連れて行った。二日後、この大魚はマチウチウを故郷へ送り返そうとしたが、彼はなおしばし留まりたいと望んだ。魚はそれを聞き入れず、彼の耳をくわえて海中に引き入れ、しばらくして海上に浮かび、彼を自分の背に乗せて無事に里漏社に帰着した。この往復に五日、滞在に二日かかったが、帰ってみれば旱魃もやみ、病氣も絶えていた。これ以降、海に向かって雨乞することが始まった*²⁸。

これら二つの故事は採録地も同じで、同一故事のヴァリエーションと見てよく、いずれも女人島を主題にしてもいるが、島の住民たる女性たちの性格はまったく異なる。すなわち【事例 1a】の女たちは男を食う恐るべき食人鬼だったのに対し、【事例 1b】では青年は島から帰るのを拒んでいるところを見ると、ここを楽園と感じたもののようである。ここには、フレンツェルの言う「島に住む者」の両義性がよく表れている。

同様に、海の彼方に不思議な島があり、その「島に住む者」は自分たちとは異なる特徴をもつ、という話は他にもあり、必ずしも女人島には限られない。たとえば次はパゼツヘ族の伝承である。

【事例2】 昔、ダムリラルス (damulirarus) とウパイラルス (upairarus) という二人兄弟がいた。ある日、二人で海岸に出ていたところ、兄は大きな亀に手をくわえられて海の中に連れて行かれ、しばらくして見知らぬ陸地にたどり着いた。この島の住民はタヌヘヌヘ (tanuhenuhe) といい、肛門を持たないため、常に飯の湯気のみを吸って生活していた。やがて、ダムリラルスは一人の老女の助けを得、鹿皮を何枚も重ねて皮舟を造り、これに乗って故郷に帰ることができた。それまでは台湾にまったく獣類がいなかったが、この時に彼が皮舟に少数の獣類を乗せて連れ帰ったため、山野にこれらが棲むようになった^{*29}。

今の話では、「島に住む者」の性格ははっきり示されていない。また、女人部落が山中に存在するという話もある。次はサイシャット族ガラワン (獅頭驛) 社の例だ。

【事例3a】 昔、サイパハハン (Say pā:hā:han) という女だけの村があった。彼女らには肛門がなかったので、常に湯気のみを吸って生活していた。ある時、ロブゴツ (robengez) という男がそこへ行き、彼女らを妻として一ヶ月ばかり過ごすうち、男子が生まれた。その後、彼女らに肛門を造ってやろうと嘘を言って、焼いた鉄を数人の尻に刺して殺した。その後、ロブゴツが山上で叫んだところ死者たちは蘇生し、報復しようと追いかけて来た。彼女らは途中で穿山甲 (‘äem) の穴を見つけて竹で突き、さらに穴を掘ってみたところ、一個の薯榔が出てきたのみであった^{*30}。

同社からもまた、異伝が記録されている。それによると、

【事例3b】 昔、ルヴグル (robengez) という剛力の人がいた。ある時、彼はサイパハハン (Say pā:hā:han という) 村に赴いたところ、村民はみな肛門がなく、常に飯を食わずただその湯気を吸うのみだった。ルヴグルは、お前たちに肛門を造ってやろうと言い、鉈の柄 (palakaw) を火中で熱し、女たち数十人の尻に刺したところ、みな死んでしまった。その後、ルヴグルが山頂で「オー」 (‘ömö’ö) と呼ばわったが、死者たちは蘇生しなかった。生き残った村民たちは欺かれたのに気づき、追って来る途中、穿山甲の穴を見つけて槍で突き、さらに穴を掘ってみたところ、一個の薯榔が出てきたのみだった^{*31}。

ここまで見てきたように、「アマゾン族」に類する女人だけのコミュニティは、台湾原住民族においては島とされたり山中の村とされたりして語られてきた。それらの伝承には、いくつか興味深い要素が含まれている。たとえば、風を受けての妊娠、大魚に呑み込まれる「嚥下」(ヨナ型) といったもので、これらの分布が台湾の外にも広がっていることは周知の事実である^{*32}。が、この問題は本稿の関心とは離れるので、また別の機会に論じたい。ところで、湯気吸う人、肛門のない人は次の「下界訪問」にも登場する。

(2) 下界訪問

台湾原住民における典型的な「下界訪問」譚として筆者が気づいたものは、「湯気食う人＝肛門なき人＝地下人＝有尾人」という類型で、タイヤル (9 話)、セデック・タロコ (2 話)、サイシャッ

ト（5話）、ブヌン（6話）、ツォウ（2話）、ルカイ（1話）、パイワン（1話）、パゼッヘ（1話）という分布を示す。とりわけブヌン族でよく発達している印象を受ける*³³。以下は、ブヌン族巒社群カトグラン（Katungulan）社で記録されたものである。

【事例 4a】 昔、地下にイクルン（ilulun）という者たちが住んでいた。我々人間と同じだが、色白で尾があった。そして尾を白に隠していた。彼らは飯を食べず、湯気ばかりを食べていたため、大便をせず、その肛門は「針でさした穴」のようだった。人間が遊びに行くと飯や肉をご馳走してくれたが、あるとき人間がいたずらをしてイクルンの子に肉を食わせたら、その子は死んでしまった。イクルンは立腹して地下への入口をふさいでしまったため、以来そこへ行くことはできなくなった*³⁴。

この話では、地下人の肛門が「針でさした穴」のようだった、と言われているが、これは先の【事例 3a】【事例 3b】などを参照すると、もともと肛門がなかったのを、針などでさしてあけてやったという筋書きが転化したものかもしれない。そして今の話にも、同地から次のような異伝が伝わる。

【事例 4b】 昔、大洪水の頃に生きていたカルベスベス（kalupispis）という男は、あるとき穴を見つけ、入って行ったところ道は蛇のように螺旋状をなし、突き当たった所に一室があった。中には二、三尺くらいの小人がおり、白に腰掛けていた。そしてカルベスベスに木豆（laian）など、彼がそれまで見たこともないご馳走を出してくれた。また彼らの所にはブンヌ（punu）という鉄製の鉾もあった。カルベスベスが木豆とブンヌを所望したが拒絶されたため、彼は木豆を陰茎中に隠し、ブンヌも盗み取ってもと来た道を急ぎ帰った。以来、木豆の栽培が始まり、ブンヌは宝物として今も実在している*³⁵。

この話では「白に腰掛けていた」と言うが、先の【事例 4a】からすると、その目的は尾を隠すためであったのだろう。興味深いのは、地下人の木豆という有用植物を地上の人間が盗み出したという「作物盗み」の要素、そして、ブンヌという鉄鉾が現存しているという、【事例 1a】に通ずる伝説化の傾向である。

地下から有用植物がもたらされる故事は、台湾原住民の間に多数伝わっているが、その中に妊婦が地下から作物を持ってくるものの、死んでしまうという一群の伝承が存在し、ツォウ（1話）、ルカイ（3話）、パイワン（3話）、プユマ（1話）の各族から知られる*³⁶。次はルカイ族トナ（Kungadavan）社の例である。

【事例 5】 サキラルブアヌ（thakilaluvuanu）という地下の村へ通じる道があった。一組の夫婦がここへ行き、男は粟を包皮に入れ、女は里芋を女陰に入れて盗み帰った。それから女は妊娠し、再びサキラルブアヌへ行った。そこの人々から「帰り道で喘ぎ声を出してはいけない」と言われたのに、喘ぎ声を発してしまったため、その道は石でふさがれ、女はサキラルブアヌに留まることになった*³⁷。

今の類型では、下界は有用植物と結びつく一方で、死それも異常な死と結びついている。さらに、地下は死者の赴く世界であって、祖先ないし祖神がそこへ行くようになって以来、人間は死ぬ運命になったとする伝承も存在する。筆者が気づいたのはパイワン族からの5話だが^{*38}、その一つを以下に掲げよう。パイワン族筏灣（Ka-Paiwan-an）社の所伝である。

【事例6】 むかし祖神サジムジ（saljimlji）が粟種を得て軒畑に播き、成熟の後、取ってこれを諸人に分与した。後、なぜかこれを取り返そうとしたが、誰も同意しなかったので、彼は怒って自ら穴を掘り、その中に入った。これが世の中に死というものが生じた始めであると言う。また、なぜか社衆らはサジムジを厭い、「お前はずっと家にいて、外出するな」と言ったところ、「それでは俺は地下界（itailje）へ行く」と言い、地下に入った。これを人間に死が生じた原因という。この時、サジムジは粟粒をカジャバジャバヤン（kaljavaljavan）に与えて、「ただこの一粒を煮よ、鍋いっぱいになるから」と言って去った。後これを煮たところ、果たしてその言葉のとおりであったという。同族プンティ（Puljti）社頭目が言うには、むかしサジムジの妻が懐妊しつつあった時、その夫が地下界に行ったのを追ってスルム（sulem）という、山林中の暗い所へ至り、穴に落ちて死んだ。これを人間に死の起こった始めという^{*39}。

上記において、懐妊中の妻が夫を追って地下界に赴いたというのは、【事例5】の類型にも近い。またフレンツェルの「下界訪問」モチーフにおけるオルフェウスの物語に通ずる性格の一端も見せているが、十分に展開されるには至っていない。

なお、必ずしも下界とは限らないが、死者の国ないしは異界・霊界を訪れ、再び現世に戻ってくる話もあり、筆者はタイヤル族から4話、ツォウ族から1話を見出した^{*40}。次はツォウ族トフヤ群ララチ社の伝承である。

【事例7】 昔、一人の男が犬を連れて狩猟に出、一匹の山羊を追ううちに、この山羊は塔山の一洞穴に入って行った。男がその後から入ると、中には立派な人家があった。彼はここで一人の若い女を妻とし、数日間滞在した。この霊界では、蛇は人間界の鹿に相当し、ここでの五日間は人間界での五年間に当たる。男は、「五日後に迎えに行くから」と言う妻の言葉を信じて村に帰ったが、妻を待ち焦がれたまま、ちょうど五年目に死んでしまった^{*41}。

このように、本類型においては「行って帰ってくる」叙事文法が現れ、また「不思議な時間経過」が異界の特徴として示されている。こうした特徴も世界の諸文学作品と共通するものだが、ここでは立ち入らないでおこう。さらにまた、「人間世界」と「地下世界」の対立は、「食物を必要とする人間」と「湯気を食べる非＝人間」の対立、また「排泄」と「肛門の欠如」の対立、すなわち文化と自然の関係を示しているとも考えられる。が、こうした構造論的探究の可能性については、本稿では指摘するにとどめておきたい。

(3) 太陽を射る話

さて、本稿冒頭で示したフレンツェルの3モチーフには含まれないが、台湾原住民に広く伝わる「太陽を射る話」には、「行って帰ってくる」〈物語の文法〉をかなり明確に示している例が多いように思われる。この「太陽を射る話」は、筆者の知りえただけでも、タイヤル（26話）セデック・タロコ（8話）、サイシヤット（4話）、ブヌン（15話）、ツォウ（9話）、パイワン（5話）、プユマ（1話）、ヤミ（1話）、パゼッヘ（1話）と、やや北部・中部の山岳地帯に多いものの、広範に分布している^{*42}。ここでは一例だけ挙げよう。タイヤル族大豹（Siki）社（新竹県角板山）のものである。

【事例8】 むかし祖先の時代には、太陽ばかりで月がなく、昼になると半年は昼ばかり、夜になると半年は夜ばかりで、人々は困っていた。彼らは屈強な若者を三人選び、太陽征伐に送り出した。彼らはそれぞれ自分の赤ん坊を背負って出かけ、道すがら蜜柑を植えて行った。しかし太陽までの道程は遠く、間もなく到着という所で、かつての若者たちはもはや白髪の老人となり、三人とも死んでしまった。すると、背負われていた赤ん坊たちは、今や青年になっていたので、親たちに代わって太陽の出る所に至り、弓矢で射た。すると射られた太陽からは血が迸り、血を浴びた男は死んでしまった。生き残った者は、往路に植えてきた蜜柑を食べつつ、帰村した。その時には腰が曲がって杖をつき、白髪になって非常な老人になっていた。それ以後、射られた太陽は半分になった。（そして半分は月になったので）昼夜が分かれ、人々の生活は楽になった^{*43}。

ここには、英雄たちの出発、危難（先代の死や太陽の血による死）、太陽との格闘、そして帰還というように、はっきりとした〈物語の文法〉が見られる。さらに、往路で植えた蜜柑が帰路では育って実をつけ、食料になってくれたとか、初め一つだった太陽が射られて半分になり、その片方が月になって秩序が回復されたなど、語りの細部にわたって矛盾がないように感じられる。

では、このような〈物語の文法〉は、台湾原住民においていかにして発達してきたのだろうか。これは難しい問題であるが、ここではひとまず、彼らの間における伝統的な語りの場を確認しておきたい。それにより、テキストが文字化されず口頭で伝えられてきた現場の雰囲気と、そこでの伝承のあり方についてのヒントが得られるだろうからである。

4 台湾原住民族における伝統的な語りの環境

1880年代、もっとも早い時期に台湾原住民族の民間故事を採録した英国人で鸞鑾鼻の灯台守だったジョージ・テイラーは、パイワン族の諸伝承を発表するにあたり、その語られる場を次のように描写した。

台湾原住民の間には、語り手として成功を収めている者たちがいる。狩人たちが獲物を追いかけて回して空かせた食欲を満たし、疲れ果てて、草の空き地のへりで木々の陰に脚を伸ばすとき、一団の何人かは、果てることを知らぬ話のレパトリーにありつくチャンスを必ずやつかむ。他の時なら物語なんて迷惑だと思っている者たちも、この時ばかりは喜んで話を聞いているうちに、語り手の深い、ゆったりした単調さに誘われて、1人また1人と眠りの神の手にかかってゆく。雨季の物憂い日々、何人かで外に出た時にも、語り手は盛んな求めを

受ける。1話の語りはしばしば幾日かに及び、話が佳境に近づくと語り手が休憩をとることは我々が雑誌執筆者たちと同様であって、かくして次の舞台での聴衆を確保するのである。彼を囲む聞き手の輪が広がれば、それだけ彼のプライドも増す。ライバルを犠牲にして自分の聴衆を増やすことは、語り手の野望の最たるものである*⁴⁴。

ここに描かれるのは、物語りの名手とされるような人物がいて、聴衆の興味を惹きつけている様子である。

他方、もっと家庭的な環境で物語がなされることもあったようだ。同じパイワン族において、大正10年(1921)頃から昭和13年(1938)頃にかけて、村々で伝承の採録にあたった画家、小林保祥^{やすよし}もまた、第二次大戦前の昔語りの光景を、次のように活き活きと描き出している。

昔話をする時の情景は、パイワンもまた、誠になごやかな一幅の絵である。子供たちがお婆さんに昔話を所望すると、お婆さんは心よく引受けて、「さあ、さあ、それでは、私がお話をしようよ。さあ、私の『ミリミリガヌ (mirimirigan)』*⁴⁵をお聴きよ。昔、豹と熊とは兄弟であったとさあ」などと、節をつけて話し出すと、聴手の少年少女たちは、みな黙ってお婆さんの顔をじっと見て一心に聞く。話が進んで、何か驚くような事が出て来ると、みなは、「やあ」(少年なら)「あら」(少女なら)などと驚いたり、話が哀れなところになると、「まあ、かわいそうにねえ」と同情したり、「悪いやつだなあ」と憤慨したりする。危いところをうまく逃れたところなどには、「まあよかったわねえ」と、いかにも安心したように溜息をつく。

このように話に合せていちいち合槌を打つ。そばに大人がおれば、その人もまた、みなと共に合槌を打つ。何度聴いた話でも、いかにも初めて聴くように、驚いたり感心したりする。六、七歳の子どもでもよく心得ていて、大人と同じようにするから、少しこまちゃくれた感がある。これは話手に対する礼儀であり、また聴手が楽しむと共に、話手にも楽しませるのであろうと思われる。

老婆や子供たちばかりでなく、少女たちが手仕事を持って数人集った時など、みんなで昔話をすることがある。どうせみんな知っている話だけれど、「何々の話は、誰さんが上手で面白い。」などと言って、その人に話させたりして、みなは手仕事をしながら、いちいち合槌を打って楽しく聴き、仕事にも飽きないと言うわけである*⁴⁶。

この記述に見られるのは、老人が少年少女たちに、あるいは少女たちの手仕事の合間に語られる、家庭的な叙事環境である。先のテイラーの記録にあるような語りの名手は、こうした環境で育ち、次第に公的場面でその役割を期待されるようになった者たちかもしれない。そして、そのような者たちの間で、聞き手を魅了する技法として、〈物語の文法〉が錬磨されてきたのかもしれない。

5 結論

台湾原住民族の口承文芸・民間文学の中にも、フレンツェルが挙げた三つの世界的〈文学モチーフ〉が存在している。そのうち「アマゾン族」は、女人島もしくは山中などの女人部落として描かれる。「島に住む者」の性格が両義的だというフレンツェルの指摘は、台湾原住民族においても当てはまる。そして、「下界訪問」モチーフもあるにはあるが、フレンツェルが強調したような死者の国として

の性格が強く現れているのは、パイワン族にほぼ限られている。

そしてこれら3モチーフにおいては、ある程度「伝説化」の傾向が見られることも確認された。【事例 1a】では丸木舟、【事例 4b】では鉄鉾というように、現存する（と言われる）事物と、これらの故事を結びつける傾向が見てとれる。しかし、これらの諸モチーフを含む物語中においては、〈物語の文法〉の発達は微弱であるように思われる。たしかに「行って帰ってくる」要素は多く見られるものの、その過程における危難や闘争などは明確に現れていない。そうした要素をよりはっきりと示しているのは、「太陽を射る話」の一連の伝承であろう。

ただし、先に挙げておいた世界的英雄神話の諸要素のうち、台湾原住民にも散見するものがある。まず英雄が大魚に呑み込まれる「嚙下」（ヨナ型）は、上述のとおり女人島譚にしばしば現れている。次に、英雄が箱などに入れられ流される「遺棄・漂流」については、ことにパイワン、プユマ、アミ各族の Vagina dentata 譚において、陰部に歯をもつ女性が箱に入れられて遺棄され漂流する、という形で現れる^{*47}。また英雄が竜などの怪物と闘う「竜退治」も、やはりプユマ族を中心に伝えられる^{*48}。最後に、障害を設けつつ逃げる「呪的逃走」・「障害競走」は主にパイワン族から報告されている^{*49}。

したがって、もし今後、台湾原住民族の伝統的な口承文芸・民間文学をもとにした創作作品が生まれ、現代に生きる人々の「普遍的な」嗜好に合うものが作られるとするならば、以上のような〈文学モチーフ〉や〈物語の文法〉、さらにその他、英雄神話に頻出する諸要素を組み合わせたようなものとなる可能性がある。その意味で、格好の素材はすでに存在しているとも言えるが、それらが活かされるか否か、またその結果生まれた作品の出来不出来といった問題は、すでに本稿の範囲を越えている。

* 1 本稿は、2013 年 10 月に台北の国立師範大学で行われた、第三屆敘事文学与文化国際學術研討会のために準備され、予稿集にはその中国語版（王立雪訳）が掲載された。しかし、事情により筆者は同シンポジウムに参加できなくなったため、口頭発表は行っていない。また日本語版の本稿もこれまで未発表である。

* 2 William Bascom, “The Forms of Folklore: Prose Narratives,” in Alan Dundes, ed., *Sacred Narrative: Readings in the Theory of Myth* (Berkeley: University of California Press, 1984), pp. 5–29.

* 3 台湾ツォウ族出身で、台湾原住民族の口承文芸・民間文学に関し多くの論著を発表してきたパスヤ・ボイツヌ（浦忠成）氏によれば、「原住民のもつ叙事的な口伝文学は、神話・伝説・民間故事といった様式を含む」。巴蘇亞・博伊哲努（浦忠成）『叙事性口傳文學的表述：台灣原住民特富野部落歷史文化的追溯』（臺北：里仁書局，2000 年），8 頁。ただし「神話」は、必ずしも叙事的要素が強いものばかりではない。たとえば中国神話においては、この要素が前面に現れていない。鍾宗憲『中國神話的基礎研究』（臺北：洪葉文化，2006 年），70 頁。

* 4 Elisabeth Frenzel, *Motive der Weltliteratur. Ein Lexikon dichtungsgeschichtlicher Längsschnitte*, 6., überarbeitete und ergänzte Aufl. (Stuttgart: Alfred Kröner Verlag, 2008).

* 5 すなわち女族のこと。

* 6 Herodotus, *Historiae*, 4.110–117.

* 7 Frenzel, S. 11–26.

* 8 Frenzel, S. 373–391.

- * 9 Frenzel, S. 700-714.
- * 10 Ovidius, *Metamorphoses*, 10.1-85, 11.1-84.
- * 11 『古事記』上巻。
- * 12 これらには、さらに詳細な下位分類が設定されている。
- * 13 Stith Thompson, *Motif-Index of Folk-Literature*, Revised and enlarged ed., 6 Vols. (Bloomington: Indiana University Press, 1955-58).
- * 14 大塚英志『ストーリーメーカー：創作のための物語論』（東京：アスキー・メディアワークス，2008年）。
- * 15 Johann Georg von Hahn, *Sagwissenschaftliche Studien* (Jena: Friedrich Mauke, 1876), Tafel.
- * 16 Otto Rank, *Der Mythos von der Geburt des Helden. Versuch einer psychologischen Mythendeutung* (Wien: Verlag Turia + Kant, 2000), S. 91-92 (邦訳 102-103 頁)。強調は原著による。
- * 17 Rank, S. 25-89 (邦訳 27-100 頁)。
- * 18 Lord Raglan, *The Hero: A Study in Tradition, Myth, and Drama* (New York: Vintage Books, 1956), pp. 174-175 (邦訳 153-154 頁)。
- * 19 ウェールズの英雄 Lleu Llaw Gyffes については、Bernhard Maier, *Lexikon der keltischen Religion und Kultur* (Stuttgart: Alfred Kröner Verlag, 1994), S. 210; James MacKillop, *A Dictionary of Celtic Mythology* (Oxford: Oxford University Press, 1998), pp. 299-300 を参照のこと。
- * 20 Raglan, pp. 175-185 (邦訳 154-163 頁)。
- * 21 Jan de Vries, *Heldenlied und Heldensage* (Bern: Francke Verlag, 1961), S. 282-289. また Jan de Vries, *Betrachtungen zum Märchen. Besonders in seinem Verhältnis zu Heldensage und Mythos*, 2. Aufl. (Helsinki: Academia Scientiarum Fennica, 1967), S. 137-153 も参照。
- * 22 Joseph Campbell, *The Hero with a Thousand Faces*, 3rd ed. (Novato, California: New World Library, 2008), pp. 210-211 (邦訳下 89-90 頁)。鍾宗憲『中國神話的基礎研究』31-32 頁も参照。
- * 23 大塚『ストーリーメーカー』。
- * 24 Hitoshi Yamada, *Religiös-mythologische Vorstellungen bei den austronesischen Völkern Taiwans. Ein Beitrag zur Ethnologie Ost- und Südasiens*, Dissertation (Universität München, 2002), S. 319-413. また山田仁史「台湾原住民神話研究綜述」譚佳（訳）、『中国比較文学』2007年第4期, 60-68 頁も参照。
- * 25 小島由道ほか『蕃族慣習調査報告書』全8冊（台北：臨時台湾旧慣調査会／台湾総督府蕃族調査会，1915-22年）；佐山融吉『蕃族調査報告書』全8冊（台北：臨時台湾旧慣調査会／台湾総督府蕃族調査会，1913-21年）；小川尚義／浅井恵倫『原語による台湾高砂族伝説集』（東京：刀江書院，1935年）。
- * 26 Yamada, Nr. 58, S. 377-380.
- * 27 小島由道ほか，第2冊（1915年）19-21 頁。
- * 28 伊能嘉矩「台湾土蕃の口碑」『東京人類学会雑誌』第23巻270号（1908年9月）461 頁。
- * 29 同前註，459-461 頁。
- * 30 佐山融吉，第5冊（1921年）、410 頁。
- * 31 小島由道ほか，第3冊（1917年）14-15 頁。
- * 32 李福清『從神話到鬼話：台灣原住民神話故事比較研究』（臺中：晨星出版社，1998年）181-218 頁；李福清『神話與鬼話：台灣原住民神話故事比較研究』增訂本（北京：社會科學文獻出版社，2001年）183-221 頁。
- * 33 Yamada, Nr. 57, S. 376-377.
- * 34 小川尚義／浅井恵倫，596-598 頁。
- * 35 佐山融吉，第6冊（1919年）12-13 頁。
- * 36 Yamada, Nr. 33, S. 353-354.
- * 37 小川尚義／浅井恵倫，384-385 頁。
- * 38 Yamada, Nr. 23, S. 345.
- * 39 小島由道ほか，第5冊（1920年）178-179 頁。
- * 40 Yamada, Nr. 54, S. 373-374.

- * 41 佐山融吉、第4冊（1915年）119-120頁。
- * 42 Yamada, Nr. 2, S. 321-324.
- * 43 小川尚義／浅井恵倫、41-44頁。
- * 44 George Taylor, “Folk-lore of Aboriginal Formosa,” in Glen Dudbridge, ed., *Aborigines of South Taiwan in the 1880s: Papers by the South Lightkeeper George Taylor* (Taipei: Shung Ye Museum of Formosan Aborigines, 1999), p. 136.
- * 45 「バイワヌ Paiwan 族は、昔の事績を伝えた説話を『ミリミリガヌ』mimirigan と言う。神話、伝説と民譚もまたこれに含まれる。この語源は明らかでない」。小林保祥『バイワン伝説集』松澤員子編（台北：南天書局、1998年）90頁。
- * 46 小林保祥『バイワン伝説集』91-92頁。
- * 47 Yamada, Nr. 28, S. 348-349.
- * 48 Yamada, Nr. 93, S. 407-408.
- * 49 Yamada, Nr. 66, S. 387-388.

引用文献

(1) 古典：

- ・ Herodotus, *Historiae* (The Loeb Classical Library; 117-120), London: W. Heinemann, 1920-25.
- ・ Ovid (Ovidius), *Metamorphoses* (The Loeb Classical Library; 42-43), London: Heinemann, 1916.
- ・ 『古事記』（角川ソフィア文庫）東京：角川学芸出版、2009年

(2) 和文：

- ・ 伊能嘉矩 1908「台湾土蕃の口碑」『東京人類学会雑誌』23(270): 459-462.
- ・ 大塚英志 2008『ストーリーメーカー：創作のための物語論』（アスキー新書；84）東京：アスキー・メディアワークス。
- ・ 小川尚義／浅井恵倫 1935『原語による台湾高砂族伝説集』東京：刀江書院。
- ・ 小島由道ほか 1915-22『蕃族慣習調査報告書』全8冊、台北：臨時台湾旧慣調査会／台湾総督府蕃族調査会。
- ・ 小林保祥 1998『バイワン伝説集』（台湾原住民研究資料叢書；2）松澤員子（編）台北：南天書局。
- ・ 佐山融吉 1913-21『蕃族調査報告書』全8冊、台北：臨時台湾旧慣調査会／台湾総督府蕃族調査会。

(3) 中文

- ・ 山田仁史 2007「台湾原住民神話研究綜述」譚佳（訳）、『中国比較文学』2007年第4期：60-68.
- ・ 巴蘇亞・博伊哲努（浦忠成）2000『叙事性口傳文學の表述：台湾原住民特富野部落歴史文化的追溯』台北：里仁書局。
- ・ 李福清 1998『從神話到鬼話：台湾原住民神話故事比較研究』（台湾原住民系列；26）台中：晨星出版。
- ・ 李福清 2001『神話与鬼話：台湾原住民神話故事比較研究』増訂本（文学人類学論叢）北京：社会科学文献出版社。
- ・ 費德廉／羅效德（編譯）2006『看見十九世紀台灣：十四位西方旅行者的福爾摩沙故事』（發現台灣；2）台北：如果出版社。
- ・ 鍾宗憲 2006『中國神話的基礎研究』（神話學叢書）台北：洪葉文化。

(4) 欧文

- ・ Bascom, William. 1984[1965]. The Forms of Folklore: Prose Narratives. In Alan Dundes, ed., *Sacred Narrative: Readings in the Theory of Myth*. Berkeley: University of California Press, pp. 5-29.
- ・ Campbell, Joseph. 2008[1949]. *The Hero with a Thousand Faces*, 3rd ed. (Collected Works of Joseph Campbell). Novato, California: New World Library. (キャンベル『千の顔をもつ英雄』上下、ハヤカワ・ノンフィクション文庫、倉田真木／斎藤静代／関根光宏訳、東京：早川書房、2015年)
- ・ Frenzel, Elisabeth. 2008. *Motive der Weltliteratur. Ein Lexikon dichtungsgeschichtlicher Längsschnitte*. 6., überarbeitete und ergänzte Aufl. (Kröners Taschenausgabe; Bd. 301). Stuttgart: Alfred Kröner Verlag.
- ・ von Hahn, Johann Georg. 1876. *Sagwissenschaftliche Studien*. Jena: Friedrich Mauke.
- ・ MacKillop, James. 1998. *A Dictionary of Celtic Mythology*. Oxford: Oxford University Press.
- ・ Maier, Bernhard. 1994. *Lexikon der keltischen Religion und Kultur*. (Kröners Taschenausgabe; Bd. 466). Stuttgart:

- Alfred Kröner Verlag (マイヤー『ケルト事典』鶴岡真弓監修、平島直一郎訳、大阪：創元社、2001年)
- ・ Raglan, Lord (FitzRoy Richard Somerset, 4th Baron Raglan). 1956[1936]. *The Hero: A Study in Tradition, Myth, and Drama*. New York: Vintage Books. (ラグラン『文化英雄』大場啓仁／鈴木龍一／田中啓史訳、相模原：太陽社、1973年)
- ・ Rank, Otto. 2000[1909, 1922²]. *Der Mythos von der Geburt des Helden. Versuch einer psychologischen Mythendeutung*. Wien: Verlag Turia + Kant. (ランク『英雄誕生の神話』野田倬訳、京都：人文書院、1986年)
- ・ Taylor, George. 1999[1887]. Folk-lore of Aboriginal Formosa. In Glen Dudbridge, ed., *Aborigines of South Taiwan in the 1880s: Papers by the South Cape Lightkeeper George Taylor*. (Shung Ye Museum of Formosan Aborigines Monograph; 2). Taipei: Shung Ye Museum of Formosan Aborigines / Institute of Taiwan History, Academia Sinica, pp. 136–149.
- ・ Thompson, Stith. 1955–58[1932–36]. *Motif-Index of Folk-Literature*, Revised and enlarged ed., 6 Vols. Bloomington: Indiana University Press.
- ・ de Vries, Jan. 1968[1954]. *Betrachtungen zum Märchen. Besonders in seinem Verhältnis zu Heldensage und Mythos*, 2. Aufl. (FF Communications; Vol. 63, 2 = No. 150). Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia / Academia Scientiarum Fennica.
- ・ de Vries, Jan. 1961. *Heldenlied und Heldensage*. (Sammlung Dalp; Bd. 78). Bern: Francke Verlag.
- ・ Yamada, Hitoshi. 2002. *Religiös-mythologische Vorstellungen bei den austronesischen Völkern Taiwans. Ein Beitrag zur Ethnologie Ost- und Südasiens*. Dissertation, Universität München. (<https://edoc.ub.uni-muenchen.de/7335/>)